

絆

あれはすうっと
若い頃だった
暗いばかりの
気持ちの中

ひとすじの光
安らぎ求めて

心の奥 呼ぶ声
導かれ ゆくよう
暗い夜から朝が来て

あなただけに想いをたくし
長いみちのりかけていた

重ねた日々 二人の想い
これまでの足跡

時は静かに
川のように
流れてゆく
止まることなく

その中で見つけた
絆 揺るぎなく

遠い空 夢描く
声と声 韶き合う
新しい風が頬を撫でる

あなたとなら どんな道も
希望へと続いてゆく

重ねた日々 二人の願い
未来照らす灯に

何にしても

涙も笑いも
何にしても綺麗だ
心を映す
まるで鏡のように

新しい光が差し込む窓辺
雲がたくさんで柔らかだ

落ち葉舞い散る
枯れゆく色
静かな余韻を
その瞬間の輝きを残して

そして僕ら歩む日々も
戸惑うことなく
たとえ揺らぎ立ち止まっても
何にしても

欠けても満ちても
何にしても綺麗な
心を灯す
夜空の月のように

星の瞬きと夜の静けさ
闇を包みこむ優しさ

花が咲いて
散りゆく時
儚い命も
その瞬間の輝きを残して

そして僕ら重ねる日々
戸惑うことなく
たとえそれが遠回りでも
何にしても

冷たい風

冷たい風 頬を撫でる
遠くの空 澄み渡る
白い息が 言葉包む
肩すぼめて歩く

木の葉は静かに落ちて
眠りの支度始める
よく見ると稜線のような
この街見渡す

静けさを連れてくる
冬の訪れ の奥に
どこか心の深くに
何か影を落とす

冷たい風 頬を撫でる
遠くの空 澄み渡る
白い息が 言葉包む
肩すぼめて歩く

川面に映る光は
細く短く揺れている
鳥達の声もやがて
小さくなつてゆく

けれどこのまま
うつむいているだけでなく
新しい芽吹きの
季節 待ち続ける

冷たい風 頬を撫でる
遠くの空 澄み渡る
白い息が 言葉包む
肩すぼめて歩く

冬ごもり

窓の外の何か白く光り消えた
音ひとつ聞こえない 人の声も

部屋の片隅にある 青く光り瞬く
WiFi のあかりが ひとしきり

湯気立つカップ
両手で添える mm
組む足動かし
落ちそうな膝掛け
またくるまり直す

目の前 激しい
映像 音響
小さな 楽しみ
春待つ 冬ごもりで

窓の外に何か白く舞つて消えた
緩やかに流れゆく午後の時間

テーブルの上にある雑誌のページめくる
内なる世界の旅 身を委ね

着信の音
小刻みな振動 mm
手を伸ばし立ち上がり
落ちそうな膝掛け
またくるまり直す

孤独な ことでなく
画面越し 語らい
小さな 楽しみ
春待つ 冬ごもりで

夜の初詣

石畳を踏みしめて
歴史の息吹 足元に

成田山の大伽藍
夜空に浮かぶ灯火に

家族の手をとって
進むその温もり
冬の夜の冷たささえも
優しく包んでゆく

本堂に響く読経する人たちの
祈りは一つに結ばれてゆく

「今年もどうか健やかに」
小さな声でつぶやいて

成田山の静寂と
夜空に光る月と星

「今年もよろしく」と
照れ混じりに言い合って
微笑み交わす瞬間に
新年が始まる

破魔矢の鈴の音
澄んだ空気を運ぶよ
打ち鳴らす柏手
響くよ 夜空に

かがやく瞳

幼い子の瞳 純粹に光る
キラキラ輝く ビー玉のように
綺麗な瞳が 何もしなくても
嬉しさと共に さらにひとしおに

面白そうなもの見せた時
驚いたように見開く瞬間
はっきり伝わる感情
喜びの顔に相まって嬉しくさせる

大人には見えない青い世界
無邪気にさりげなく 観いている
固定観念もなく不思議がらずに
ありのままのまま受け止めている

誰もが昔の子供の感覚
思い出せないで曇った瞳で
つつましい中に新しい刺激を
いつも感じていたことも忘れている

本当に面白くないと
愛想笑いで笑うこともなく
はっきり伝わる感情
羨ましいほどに正直に生きている

大人には見えない青い世界
無邪気にさりげなく 観いている
固定観念もなく不思議がらずに
ありのままのまま受け止めている